罪悪感と共感性，感情状態の関係について

山室　英之
（久保克彦ゼミ）

問　　題

一般的に他人を傷つけてしまったときや，社会の規則を破ってしまったときに，人は申し訳ないと感じる。このような反社会的あるいは不道徳と考えられる行動をすることで起こる感情を罪悪感という。また，罪悪感に関して薊（2008）は，「罪悪感は社会的苦境場面において生起しやすい。社会的苦境場面とは、他者に迷惑をかけたり、規範を逸脱してしまったり、人前で失態を曝してしまうような場面のことであり、集団や社会への適応が問われる危機的場面である」と述べている。このように罪悪感とは，社会の中で生きる人にとって密接な感情である。この「申し訳なさ」を有光(2001a）は，罪悪感に苦しんだ末に，抑うつ症状に陥るなど多くの心理的症状の原因となるとしている。それは、申し訳ないという感情が何か誤ったことをしてしまった際に叱られるという不安や恐怖にかかわっているからである。これらは無意識的なものであり，超自我の形成の基礎にあたる。そして，そのような不安や恐怖は逃避的な思考を生み，社会的に自己処罰，低い自己評価，受動性，競争拒否など様々な形で不適応な行動を生起させてしまう。

精神分析学においても，罪悪感は精神病理を引き起こすものとして考えられている。例えば，抑うつの起源は罪悪感にあるとされているし，フロイト（1900）の「イルマの夢」のなかに罪悪感の問題が描かれている。そして，精神分析学者たちによると，この感情はエディプス・コンプレックスにその源があるという。フロイト（1930）は罪悪感の原因を二つの段階に分けて論じている。第一の段階は子供が親の愛を喪失する不安に直面した時である。そのプロセスは，親の保護なしでは生きていくことの出来ない子どもが，自身の誤った行為により親の怒りを引き起こし，その保護を失ってしまうという不安から罪悪感を喚起するというものである。この段階での罪悪感は，自分のしたい行動を制御することによって，親の怒りに触れず保護を失ってしまうという不安も起こらないために，消失していく。つまり，その罪悪感は持続して病状の原因になることがない。様々な病状の原因となる罪悪感は，エディプス期と呼ばれる三者関係が存在する時期の中で生じるのである。それは，超自我の形成が三者関係の葛藤をどのように処理するかによって決まり，その超自我の形成のプロセスの中で生じるのである。エディプス期に入ると，子どもは母を獲得したいと考え，その障害となる父を排除したいという願望を持つようになる。しかし，それと同時に父の権威に気づき，自身の母を獲得したいという願望によって，父の怒りを引き起こすのではないかと去勢不安が生じるようになる。そして，子どもは父を排除しようとする願望を断念し，父に同一化して男らしさを自身の中に取り込み，超自我を形成していく。また，その超自我には，その時に断念された願望を含んでおり，その願望は自己破壊的に作用するようになる。それは，その願望が行為として実行されていなくても，超自我にとって誤った行為と同様に罰せられる対象となるからである。誤った行為を断念しても，そのような願望をもってしまったことが，超自我から罰せられ，不安をひき起こす引き金となる。このような超自我の中で喚起する不安が無意識過程の中での罪悪感である。そして，この罪悪感の程度が重くなると罪の意識と感じるのではなく，ノイローゼや狂気といった様々な症状として表れてくる可能性が示されている。そして，妄想患者の中には世の中の全ての過ちに対して，その責任を自分一人で抱え，絶えず苦痛な罪悪感のなかに生き，自分自身を罰しようとし，自害しようとする者もいる。

罪悪感については，自己処罰，受動性といった

不適応な行動や抑うつ，ノイローゼといった病状の原因となるような知見が一般的ではないだろうか。ところが，近年の研究では罪悪感の異なる性質が取り上げられている。その異なる性質を持つ罪悪感に関して有光（2001a）は，社会的行動を制御する道徳的感情であり，規則を守ったり対人関係に役立つ機能を持つと述べている。さらに有光（2001a）は，罪悪感は，自己が傷つけた人への補償行動といった適応的行動を喚起するとしている。それは，自分自身の行動の善悪が判断できる人が誤った行動をとった場合，申し訳ないと感じるというものである。薊は（2008）“後悔”“深い反省”などがそうした罪悪感に相当すると述べており，その申し訳なさによって過ちを内省しようとした後に，それを正しい行動へ向けようとする補償行動の喚起が起こるのである。そのため，有光（2001a）が述べるように申し訳なさが規則を守らせる方向付けをして，禁止事項の遵守を促す道徳的な感情であり，誤った行為の補償行動の喚起によって対人関係を円滑に進めることを可能にする感情だといえる。罪悪感には，上記のように対立する側面を併せ持っている。それは，誰もが罪悪感に苦しみ抑うつに悩んでいるわけではない。有光（2002）が罪悪感を感じやすい，感じにくいといった個人差も存在するだろうと述べているように，他人とまったく同じ感情を抱くことが難しいだろう。つまり，抑うつに悩む人とそうでない人が感じる罪悪感が同様であるとは言えない。このように罪悪感は病理的な機能を持っている一方で、程度によって適応的な機能も持っている。

罪悪感の喚起において石川・内山（2002）は，共感性と役割取得能力が重要な役割を果たすと述べている。それは，申し訳ないと感じるには相手が傷ついたことに気づかなければならない。その際に，相手が感じているような感情を自分も感じる共感性が必要となる。さらに，自分の行動が誤っていると気づかねばならない。その際に，誤った行動を自分以外の視点でとらえる能力である役割取得能力が必要となる。また，共感性と罪悪感の関係において佐伯（2008）は，罪悪感は思考を傷ついた他者に焦点化するため、援助行動を動機づけ、親密な対人関係を促進する共感との関連があると述べている。罪悪感の喚起する状況において、対人場面と規則場面を上げることができる。対人場面で起こる罪悪感とは，誰かにうそをついてしまったときに申し訳ないと感じることである。同様に，規則場面で起こる罪悪感とは，校則を破ってしまったときに申し訳ないと感じることである。この対人場面と規則場面において有光（2006）は，対人場面の罪悪感には情動的共感性が影響し、規則場面での罪悪感には役割取得能力が関係することが分かっていると述べている。発達段階から見た対人場面と規則場面の罪悪感について，石川・内山（2002）は対人場面の罪悪感を、大学生が中学生、高校生よりも強く感じることを明らかにし、そして規則場面の罪悪感を中学生が最も強いことを明らかにした。また，大学生の罪悪感に関して石川・内山（2002）は，青年は物を壊す、けんかをするなどの行為には罪悪感を感じにくくなる一方で、うそをついたり、配慮を欠いた行為に罪悪感を強く感じるのであると述べている。罪悪感について男性と女性で比較検討も行われている。それは石川・内山（2002）が，女子が男子よりも対人場面の罪悪感を強く感じると述べるように，性差による違いが示されている。このような罪悪感の喚起に必要となる能力や状況，さらに発達段階や性差による程度の違い以外にも，罪悪感が向社会的行動を促進する機能を持つ感情であることが，先行研究の中で述べられている。ここでの向社会的行動とは、何か失敗をした場合に物事を円滑に進める行為、またはその失敗の補償を行おうとする行動である。薊（2008）は，罪悪感を感じやすい人間は、他人に責任をなすりつけず、怒りを抑制し、敵意などの攻撃的認知を抱かない傾向を示していると述べている。同様に佐伯（2008）は，罪悪感が，恥ほど苦痛ではなく，自己全体を脅かすこともないために，防衛的怒りを起こす必要はなく，むしろ他者への共感を促進させ，怒りを抑制する働きをすると述べている。このように，罪悪感の喚起しやすい人は社会的な活動を阻害する怒りや敵意のような否定的な感情を抑制し，物事を円滑に進める役割を担っている。

近年の罪悪感の研究において，薊（2008）は自己意識感情の心理的機能を明らかにするという純粋学問的興味の観点からだけでなく、道徳教育や

人事管理などの応用的療育においても，極めて興味深いテーマと考えられると述べている。他にも，高井（2004）は近年、向社会的行動や反社会的行動の発現を研究する上で，罪悪感の果たす役割が注目されているとしている。また，石川・内山(2002）は激動する青年期の中で、社会性に重要な役割を果たす罪悪感を解明していくことは、その罪悪感に関係する要因を理解するだけでなく、反社会的行動を抑制するうえでも役立つと考えられると述べている。これまで述べてきたように病理的な側面を持つ反面，適応的な側面を持つ罪悪感の研究は，社会学や教育学においてだけではなく臨床心理学の領域に関係の深いテーマである。

目　的

石川・内山（2002）の研究によると，青年期は抽象的、論理的思考が可能になり、客観的に自分自身をみつめることが可能になるため，罪悪感が喚起しやすくなる時期である。それは客観的に善悪を判断し自身の行為をいさめ，“申し訳ない”という感情を喚起させることが出来るからである。このように，青年期は罪悪感を喚起しやすい時期である。本研究では，罪悪感を喚起しやすい青年期を調査対象者として調査を行う。罪悪感の研究の多くは，罪悪感と混同しやすい恥あるいは羞恥心との比較研究が多く，罪悪感のみを取り上げた研究はほとんどなかった。罪悪感のみを扱うものも一部あったが，発達を段階に分けて研究を行っていた。青年期の罪悪感を扱い，またその罪悪感を一つの感情状態として扱い，他の感情状態との比較を目的として行われた研究は見当たらなかった。そこで本研究では，石川・内山（2002）による青年用罪悪感質問紙と，登張（2003）による多次元的共感性尺度と，寺崎・岸本・古賀など(1992）による多面的感情状態尺度を用いることで，青年期の罪悪感の特性に関する調査を目的とする。また有光（2001b）は，男性よりも女性のほうが他人への思いやりに関心があり、対人間の罪に傷つきやすいと述べているため，性差の比較も行う。

仮　説

仮説１　罪悪感と共感性の間には正の相関が見られる。

適応的な機能を持つ罪悪感ならば、他者の苦痛に共感し、その責任を負うため申し訳ないと思い，共感性が高くなる，つまり，罪悪感と共感性の間には正の相関が見られると考えられる。罪悪感は相手の視点に立つ必要があり、共感性が高くなることは先行研究において示されている。

仮説２　罪悪感と共感性は男性と女性で異なる相関が見られる。

有光（2001b）は，男性よりも女性のほうが罪悪感を喚起したという結果を出して，その原因を性差における共感性の違いによるものと述べている。さらに石川・内山（2002）共感性が対人場面の罪悪感に影響を与えていると述べていることから、対人場面の罪悪感と共感性において性差が表れると考えられる。

仮説３　罪悪感と肯定的感情に正の相関が見られる。

仮説１によって罪悪感と共感性に正の相関があれば，適応的な機能を持つ罪悪感と考えられる。そしてその罪悪感は，向社会的に結びつきやすいので，否定的な感情よりも肯定的な感情を抱きやすい。つまり，罪悪感と肯定的感情に正の相関が見られると考えられる。今回使用する感情状態尺度は抑鬱・不安，敵意，倦怠を否定的感情，活動的快，非活動的快，親和を肯定的感情，集中，驚愕を中性的感情としている。また，仮説１において罪悪感に性差が表れた場合，性差についても検討をする。

罪悪感が肯定的感情と正の相関が見られた場合，罪悪感のみが肯定的感情に影響と与えたと断定できない。佐伯（2008）は共感性が援助行動を動機づけ，密接な対人関係を促進すると述べている。このように罪悪感の喚起に必要となる共感性が肯定的感情と結びついた可能性がある。そのため，共感性要因を除いた罪悪感要因と感情状態との偏相関係数を出し検討を行う。

方　法

調査対象

京都学園大学に在籍する大学生（計238名）を対象として質問紙調査を行った。記入漏れのあったデータについては使用しなかったため，有効回

答数は213名（男性103名，女性110名，平均年齢19.81歳，範囲：18～24歳，*SD*＝1.37）であった。

調査期間・形式

2010年６月下旬から７月上旬にかけて授業時間内に質問紙を配布，実施した。また個別に依頼して配布，実施した。回答所要時間はおよそ15分であった。

質問項目

回答者には年齢・性別について記入させた。質問項目には，青年用罪悪感質問紙（石川・内山，2002；21項目，４点尺度），多次元的共感性尺度（登張，2003；30項目，５点尺度），多面的感情状態尺度（寺崎・岸本・古賀など，1992；80項目，４点尺度）であり，全て自記式で行った。

青年用罪悪感質問紙は，対人場面（11項目，例：友達をだましてしまいました），規則場面（10項目，例：授業中に授業と関係のないことをしてしまいました）の２因子からなる尺度である。

多次元的共感性尺度は共感的関心（13項目，例：困っている人がいたら助けたい），個人的苦痛（６項目，例：急に何かが起こると，どうしていいかわからなくなる），ファンタジー（６項目，例：小説を読むとき，登場人物の気持ちになりきってしまう），気持ちの想像（５項目，例：誰かを批判するより前に，自分がその立場だったらどう思うか想像する）の4因子からなる尺度である。

多面的感情状態尺度は抑鬱・不安（10項目，例：気がかりな），敵意（10項目，例：敵意のある），倦怠（10項目，例：つまらない），活動的快（10項目，例：活気のある），非活動的快（10項目，例：のんびりした），親和（10項目，例：いとおしい），集中（10項目，例：慎重な），驚愕（10項目，例：びっくりした）の８因子からなる尺度である。また，多面的感情状態尺度において各尺度項目を５項目減らした短縮版を使用した。

結　果

青年用罪悪感質問紙は各項目への回答に対して１～４点を「感じない（１点）」～「非常に感じる（４点）」のように各項目に与えた。そして，11項目からなる対人場面と10項目からなる規則場面の得点を，それぞれに総和を算出した。また対人場面と規則場面の総和を罪悪感総合とした。同様に，多次元的共感性尺度は各項目への回答に対して１～５点を「全く当てはまらない（１点）」～「非常に当てはまる（５点）」のように各項目に与えた。逆転項目である「困っている人を見ても，それほどかわいそうと思わない」と「私は身近な人が悲しんでいても，何も感じないことがある」は逆転の処理を行った。そして，13項目からなる共感的関心と６項目からなる個人的苦痛，６項目からなるファンタジー，５項目からなる気持ちの想像の得点を，それぞれに総和を算出した。また共感的関心と個人的苦痛，ファンタジー，気持ちの想像の総和を共感性総合とした。多面的感情状態尺度は各項目への回答に対して１～４点を「全く感じていない（１点）」～「はっきり感じている（４点）」のように各項目に与えた。そして，短縮版の使用のため各５項目になる抑鬱・不安と

表１　罪悪感と共感性の相関係数

		共感性総合	共感的関心	個人的苦痛	ファンタジー	気持ちの想像
罪悪感総合	Pearson の相関係数	.416**	.438**	.228*	.051	.403**
対人場面	Pearson の相関係数	.380**	.406**	.246**	.027	.340**
規則場面	Pearson の相関係数	.306**	.315**	.121	.061	.332**

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）である。*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）である。

性別 = 女

敵意，倦怠，活動的快，非活動的快，親和，集中，驚愕の得点を，それぞれに総和を算出した。

青年用罪悪感質問紙と多次元的共感性尺度との関係を検定するため，罪悪感総合と対人場面，規則場面の３因子と共感性総合と共感的関心，個人的苦痛，ファンタジー，気持ちの想像の５因子との間の相関を検定した。また，性差の違いを検討するために，女性の結果を表１に，男性の結果を表２にあらわした。

表１において，罪悪感総合は共感性総合（r＝.416，p<.01），共感的関心（r＝.438，p<.01），個人的苦痛（r＝.228，p<.05），気持ちの想像（r＝.403，p<.01）と統計的に有意な相関があった。しかし，ファンタジーとの間は無相関であった（r＝.051，n.s.）。対人場面は共感性総合（r＝.380，p<.01），共感的関心（r＝.406，p<.01），個人的苦痛（r＝.246，p<.05），気持ちの想像（r＝.340，p<.01）と有意な相関があった。しかし，ファンタジーとの間は無相関であった（r＝.027，n.s.）。規則場面は共感性総合（r＝.306，p<p<.01），共感的関心（r＝.315，p<p<.01），気持ちの想像（r＝.332，p<p<.01）と有意な相関があった。しかし，個人的苦痛（r＝.121，n.s.），ファンタジー（r＝.061，n.s.）との間は無相関であった。

表２において，罪悪感総合は共感性総合（r＝.500，p<.01），共感的関心（r＝.620，p<.01），気持ちの想像（r＝.333，p<.01）と有意な相関があった。しかし，個人的苦痛（r＝.064，n.s.），ファンタジー（r＝.129，n.s.）との間は無相関であった。対人場面は共感性総合（r＝.427，p<.01），共感的関心（r＝.610，p<.01），気持ちの想像（r＝.309，p<.01）と有意な相関があった。しかし，個人的苦痛（r＝－.018，n.s.），ファン

表２　罪悪感と共感性の相関係数

		共感性総合	共感的関心	個人的苦痛	ファンタジー	気持ちの想像
罪悪感総合	Pearson の相関係数	.500**	.620**	.064	.129	.333**
対人場面	Pearson の相関係数	.427**	.610**	-.018	.026	.309**
規則場面	Pearson の相関係数	.386**	.376**	.144	.208*	.226*

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）である。*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）である。

性別 ＝ 男

表３　罪悪感と感情状態の相関係数

		抑鬱・不安	敵意	倦怠	活動的快	非活動的快	親和	集中	驚愕
罪悪感総合	Pearson の相関係数	.063	-.008	.013	.137	.148	.231*	.339**	.201*
対人場面	Pearson の相関係数	.050	-.077	.016	.069	.115	.150	.226*	.075
規則場面	Pearson の相関係数	.054	.082	.003	.171	.134	.246**	.354**	.283**

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）である。*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）である。

性別 ＝ 女

表４　罪悪感と感情状態の相関係数

		抑鬱・不安	敵意	倦怠	活動的快	非活動的快	親和	集中	驚愕
罪悪感総合	Pearson の相関係数	.065	.094	.022	.297**	.264**	.163	.236*	.175
対人場面	Pearson の相関係数	.000	-.003	-.035	.243*	.234*	.060	.137	.047
規則場面	Pearson の相関係数	.122	.181	.085	.243*	.193*	.226*	.266**	.266**

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）である。*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）である。

性別 = 男

タジー（r＝.026，n.s.）との間は無相関であった。規則場面は共感性総合（r＝.386，p<.01），共感的関心（r＝.376，p<.01），ファンタジー（r＝.208，p<.05），気持ちの想像（r＝.226，p<.05）と有意な相関があった。しかし，個人的苦痛（r＝.121，n.s.）との間は無相関であった。

表１，表２から性差を検討すると，女性は共感性の因子である個人的苦痛が罪悪感の因子である規則場面とのみ無相関であったが，男性は個人的苦痛が全ての因子と無相関だった。また女性は共感性の因子であるファンタジーが全ての因子と無相関だったが，男性はファンタジーが規則場面とのみ相関があった。他の因子を比較すると，女性と男性両方に有意な正の相関があった。

青年用罪悪感質問紙と多面的感情状態尺度との関係を計るため，罪悪感総合と対人場面，規則場面の3因子と抑鬱・不安と敵意，倦怠，活動的快，非活動的快，親和，集中，驚愕の８因子との間の相関を算出した。また，罪悪感と共感性の相関は男女共に有意な正の相関を示したが，罪悪感と共感性の因子ごとの相関に性差が現れた。そのため，性差の違いを検討するために，女性の結果を表3に，男性の結果を表4にあらわした。

表３において，罪悪感総合は親和（r＝.231，p<.05），集中（r＝.339，p<.01），驚愕（r＝.201，p<.05）と有意な相関があった。しかし，抑鬱・不安（r＝.063，n.s.），敵意（r＝-.008，n.s.），倦怠（r＝.013，n.s.），活動的快（r＝.137，n.s.），非活動的快（r＝.148，n.s.）との間は無相関であった。対人場面は集中（r＝.226，p<.05）と有意な相関があった。しかし，抑鬱・不安（r＝.050，n.s.），敵意（r＝-.077，n.s.），倦怠（r＝.016，n.s.），活動的快（r＝.069，n.s.），非活動的快（r＝.115，n.s.），親和（r＝.150，n.s.），驚愕（r＝.075，n.s.）との間は無相関であった。規則場面は親和（r＝.246，p<.01），集中（r＝.354，p<.01），驚愕（r＝.283，p<.01）と有意な相関があった。しかし，抑鬱・不安（r＝.054，n.s.），敵意（r＝-.082，n.s.），倦怠（r＝.003，n.s.），活動的快（r＝.171，n.s.），非活動的快（r＝.134，n.s.）との間は無相関であった。

表４において，罪悪感総合は活動的快（r＝.297，p<.01），非活動的快（r＝.264，p<.01），集中（r＝.236，p<.05）と有意な相関があった。しかし，抑鬱・不安（r＝.065，n.s.），敵意（r＝.094，n.s.），倦怠（r＝.022，n.s.），親和（r＝.163，n.s.），驚愕（r＝.175，n.s.）との間は無相関であった。対人場面は活動的快（r＝.243，p<.05），非活動的快（r＝.234，p<.05）と有意な相関があった。しかし，抑鬱・不安（r＝.000，n.s.），敵意（r＝-.003，n.s.），倦怠（r＝-.035，n.s.），親和（r＝.060，n.s.），集中（r＝.137，n.s.），驚愕（r＝.047，n.s.）との間は無相関であった。規則場面は活動的快（r＝.243，p<.05），非活動的快（r＝.193，p<.05），親和（r＝.226，p<.05），集中（r＝.266，p<.01），驚愕（r＝.266，p<.01）と有意な相関があった。しかし，抑鬱・不安（r＝.122，n.s.），敵意（r＝.181，n.s.），倦怠（r＝.085，n.s.）との間は無相関で

あった。

表３，表４から性差を検討すると，女性は感情状態の因子である集中と罪悪感の因子である対人場面，規則場面の両方と相関があったが，男性は規則場面にのみ相関があった。他にも女性は感情状態の因子である親和と驚愕が規則場面と相関があったが、男性はその相関に加えて，感情状態の因子である活動的快，非活動的快が対人場面，規則場面の両方と相関があった。

青年用罪悪感質問紙と多面的感情状態尺度の関係を，共感性総合を制御変数として偏相関係数を出した。しかし，全て無相関であり，制御変数を共感性の各因子に変更しても結果は同様であった。

考　　察

本研究は，罪悪感を喚起しやすい青年期の大学生を調査対象とし，罪悪感を共感性と比較し，その罪悪感を一つの感情状態として扱い，他の感情状態との比較を目的として行った。同時に，性差についても検討した。

仮説１において，罪悪感と共感性の各因子の間に有意な相関があったわけではないが，全体的な罪悪感と共感性の間には有意な相関があった。これは，有光（2006）や石川・内山（2002）の罪悪感と共感性に関する研究と類似した結果が得られた。また，罪悪感と共感性の間の相関係数は正の相関を示している。この結果もまた，有光（2006）や石川・内山（2002）の研究と類似した結果となっている。また，共感性の各因子のなかで罪悪感と最も相関がなかったのは，ファンタジーであった。ファンタジーは「小説を読むとき，登場人物になったような気持ちでみることが多い」というような項目で構成されている。有光（2006）の研究の中でも，ファンタジーに相当する共感性の因子である想像力と罪悪感の相関は女性に見られるのみであった。このように，架空の物語への共感性と現実に起こる罪悪感には関係がないことが考えられる。同様に，因子ごとに見ると罪悪感の因子である規則場面と共感性の因子である個人的苦痛にも相関が見られなかった。規則場面は「授業中に授業と関係のないことをしてしまいました」というような項目で構成され，個人的苦痛は「急に何かが起こると，どうしていいかわからなくなる」というような項目で構成されている。規則場面は，客観的に違反行為をとらえることで罪悪感を喚起するが，個人的苦痛では，主観的に不安や恐怖といった感情反応を示しているといえる。このように，規則場面と個人的苦痛に相関が見られなかったのは，他者の視点の有無が関係していると考えられる。

仮説２の性差の検討では，罪悪感の因子である対人場面と共感性の因子である個人的苦痛との間の相関が，男性に見られなかったが女性には見られた。この結果から，仮説で述べたように，女性と男性の間で対人場面の罪悪感に違いがあらわれたといえるだろう。そして，有光（2006）の研究の中で羞恥心を制御変数とした罪悪感と共感性の偏相関係数で，罪悪感総合と共感性の因子である個人的苦痛が女性のみ相関を示している。また，今回の研究で使用した尺度と，この有光（2006）の研究で使用した尺度は類似している。どちらの結果も罪悪感と共感性の因子である個人的苦痛が女性のみに相関を示している点でよく似た結果を示している。その原因には，性差における共感性の違いが挙げられる。そして，社会の中で男性と女性それぞれに期待される役割や立ち振る舞いという性役割での差異や，男性と女性における対人関係の関わり方が反映したと考えられる。今回の研究では男女とも性差に関係なく共感性は対人場面，規則場面の両方の罪悪感と相関を示している。しかし，石川・内山（2002）の研究の中で，女性は共感性が対人場面，規則場面の両方の罪悪感と相関を見せているが，男性は対人場面のみに相関を示す結果となっている。石川・内山（2002）の研究が中学生から大学生までの青年を対象としているのに対し，本研究では大学生のみを対象としていた。また発達段階において，対人場面の罪悪感は大学生で、規則場面の罪悪感は中学生で最も強いことを明らかにしている。大学生のみを対象とした本研究が，男女ともに対人関係と規則場面に相関が見られたのは，青年後期に入り，抽象的・可能性的思考や仮説演繹的思考が可能になり，客観的に自分を見つめられるようになるため，中学生から大学生までの青年期の間に，規則場面の罪悪感に変化が生じたと考えられる。また，石川・内山（2002）の研究と本研究に男性のみ違いが表

れたのは，女性が男性よりも身体的・心理的発達が早く，男性が中学生から大学生の間で起こる変化がすでに終わっていたため，本研究との比較において違いがあらわれたと考えられる。

仮説３については， 女性は規則場面と肯定的感情の因子である親和にのみ相関があった。そして，男性は対人場面と規則場面の両方と，肯定的感情因子の活動的快と非活動的快に相関があり，規則場面と親和に相関があった。この結果から，罪悪感を喚起しやすい男性の方が罪悪感を喚起しやすい女性よりも肯定的感情に結びつきやすいという性差と，対人場面よりも規則場面のほうが肯定的感情に結びつきやすいという罪悪感の因子差が考えられる。罪悪感の性差は仮説２において，共感性との比較で明らかになっており，同様に，対人場面と規則場面においても共感性との比較で因子差が表れている。そして，共感性を制御変数にした場合に男女共に罪悪感と肯定的感情との相関が見られなくなったことから，罪悪感に含まれる共感性が肯定的感情に影響をしていたと考えられる。有光（2002）は，罪悪感尺度作成の際に本研究と類似した感情状態尺度を構成概念妥当性の検討のために使用している。その研究では性差による検討はされていないが，罪悪感尺度全体と肯定的感情因子の活動的快と有意な正の相関を示している。この結果は，本研究の男性の結果とよく似た結果を示している。また，有光（2002）は，自らの研究で見られた罪悪感と感情状態の相関の絶対値は.20未満のものが多く，その結果と同様の結果を持つ先行研究とを比較し，それが罪悪感特性のもつ性質をあらわしている可能性があると述べている。本研究の罪悪感と感情状態の相関の絶対値は.30前後の数値を示しているため，先行研究と整合するものであった。有光（2002）の研究の中で，罪悪感尺度全体と感情状態との間で他に相関が見られたのは，否定的感情の因子である抑うつ・不安と中性感情の因子である驚愕であった。本研究において，罪悪感と否定的感情因子である抑うつ・不安の間に相関は見られなかった。しかし，中性感情因子である驚愕と罪悪感因子の規則場面との間に相関が男女共に見られた。さらに本研究では，女性は罪悪感因子である対人場面と規則場面の両方に，男性は規則場面のみに中性感情因子である集中との間に有意な正の相関が見られた。中性感情は性差に関係なく罪悪感に結びつきやすいが，対人場面と規則場面における因子差が存在すると考えられる。そして，共感性を制御変数にした場合に，男女共に罪悪感と中性感情との相関が見られなくなった。それは肯定的感情と同じように，罪悪感に含まれる共感性が中性感情に影響をしていたためと考えられる。対人場面と規則場面の因子差において，対人場面は罪悪感の喚起に他者を必要とするが，規則場面は他者の視点を自ら行うため，他者の存在を必要としない。感情状態の把握には，他者に頼らず自らが他者の視点に立った上で自己分析を行う必要があるため，感情状態因子が対人場面よりも規則場面と有意な相関が見られたと考えられる。本研究では，共感性を制御変数にした場合に，罪悪感と感情状態因子の間に相関があらわれなかったことから，罪悪感に含まれる共感性が二者間の相関に影響を与えていると考えた。しかし，石川・内山（2002）は共感性が対人場面の罪悪感に関係し，他者の視点から違反行為をとらえる能力が規則場面の罪悪感に関係していると述べている。同様に，石川・内山（2002）は規則場面の背景に存在する他者へ目を向けさせ，直接ではないが間接的に自分の違反行為により迷惑をかけたそのような他者へ共感反応をさせると述べていることから，罪悪感因子である規則場面にも共感性が含まれていることが考えられる。

今後の課題としては，以下のことが考えられる。罪悪感と感情状態尺度の肯定的感情因子との間に有意な正の相関は見られたが，制御変数に共感性を据えた場合には相関が見られなかった。本研究では，肯定的感情因子に罪悪感に含まれる共感性が影響を与えていると述べた。しかし，罪悪感に含まれる共感性が肯定的感情因子に影響を与えたという確証はなく，そして本研究で使用した青年用罪悪感質問紙（石川・内山，2002）では罪悪感の喚起に，共感性の高さ以外にも他者の視点から違反行為をとらえる能力が果たす役割が大きいと石川・内山（2002）は述べている。また，本研究では罪悪感の対人場面・規則場面と感情状態因子との間に異なる相関を示した。その因子差について石川・内山（2002）は共感性が対人場面の罪悪

感に関係し，役割取得能力つまり他者の視点から違反行為をとらえる能力が規則場面の罪悪感に関係していると述べているように，罪悪感に含まれる役割取得能力と感情状態の関係の検討を行う必要もあるだろう。そして，石川・内山（2002）は，罪悪感の喚起は複雑であると述べており，薊（2008）も同様に欧米との比較を行い，罪悪感の機能は欧米と相違ないが，喚起される状況が多面的だと述べている。このように，さまざまな因子が罪悪感の喚起に影響している可能性もある。さらに，本研究の調査対象は罪悪感の喚起しやすい青年期の大学生であったが，石川・内山（2002）の研究では，罪悪感は年を重ねることで変化するものであると述べている。また，中学生から大学生の中で，中学生が最も規則場面の罪悪感を喚起することを明らかにしており，本研究でより感情状態と規則場面に相関が見られたことから，調査対象を変更し，今後はより幅広い年齢層を対象とすることで，罪悪感の特性を検討していく必要があると考えている。さらに，精神分析学者たちが罪悪感の原因として，エディプス・コンプレックスをあげているように，今後の研究では，被験者の成育史，三者関係についても面接法や投影法で検討する必要があるだろう。

謝　辞

本論文の作成にあたり，ご指導いただきました京都学園大学人間文化学部の久保克彦先生，行廣隆次先生，並びに，調査にご協力いただいた学生のみなさんに厚く御礼申し上げます。

参考文献

Freud S（1900）：Die Traumdeutung．Leipzig und Wien：Franz Deuticke．高橋義孝 (訳) (1969)：夢判断　新潮文庫

Freud S（1930）：Das Unbehagen In Der Kultur．Vienna：Internationaler Psychoanalytischer Verlag．吉田正己（訳）(1970)：文化の中の不安　日本教文社

薊理津子（2008）：恥と罪悪感の研究の動向　感情心理学研究，16（1），49-64．

有光興記（2001a）：罪悪感，恥と精神的健康との関係　健康心理学研究，4（2），24-31．

有光興記（2001b）：罪悪感，羞恥心と性格特性の関係　性格心理学研究，9（2），71-86．

有光興記（2002）：日本人青年の罪悪感喚起状況の構造　心理学研究，73（2），148-156．

有光興記（2006）：罪悪感，羞恥心と共感性の関係　心理学研究，77（2），97-104．

石川隆行・内山伊知郎（2002）：青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連　発達心理学研究，13（1），12-19．

氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕・山本格（1992）：心理臨床大事典　培風館　pp1029-1030．

恩田彰・伊藤隆二（1999）：臨床心理学辞典　八千代出版　pp173．

北山修・山下達久（2009）：罪の日本語臨床　創元社

佐伯素子（2008）：自己の否定的評価に関わる恥・罪悪感の覚知と心身健康との関連―青年期女子を対象として―　感情心理学研究，15（2），124-132．

澤田匡人（2008）：シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響―罪悪感，自尊感情，自己愛に着目して―　感情心理学研究，1（1），36-48．

高井弘弥（2004）：道徳的違反と慣習的違反における罪悪感と恥の理解の分化過程　発達心理学研究，15（1），2-12．

滝沢武久・加藤敏（1999）：ラルース臨床心理学事典　弘文堂　pp119．

堀洋道・山本眞理子（2001）：心理測定尺度集Ⅰ人間の内面を探る＜自己・個人内過程＞　サイエンス社　pp242-248．

堀洋道・櫻井茂男・松井豊（2007）：心理測定尺度集Ⅳ子供の発達を支える＜対人関係・適応＞サイエンス社　pp87-94.107-110．

妙木浩之（2000）：フロイト入門　ちくま新書　pp137-166．

大学生意識調査

このアンケートは大学生の意識について調査するものです。結果はすべて統計的に処理されますので，個人がどのように回答を行ったかについて問題にしたり，公表したりすることはありません。各項目についてできるだけ正確に回答してください。

回答は,他の方とご相談されることなく,必ずお一人でお答えください。回答が終わりましたら，回答欄に記入漏れがないか，もう一度確認ください。

ご協力お願いします。

京都学園大学　人間文化学部　人間関係学科　久保ゼミ所属
山室　英之

まず以下の質問にお答えください。

Q1.あなたの性別に当てはまるものに〇をつけてください。
（　男　・　女　）

Q2.あなたの年齢を記入してください。
（　　）歳

あなたが次のことをしてしまったとしたら，どの程度罪悪感を感じますか，または，感じないですか。

選択肢
1.感じない
2.やや感じる
3.かなり感じる
4.非常に感じる

1.友達をだましてしまいました・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4
2.友達の気持ちを傷つけてしまいました・・・・・・・・・・	1・2・3・4
3.友達の秘密をばらしてしまいました ・・・・・・・・・・	1・2・3・4
4.約束を破ってしまいました・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4
5.人にうそをついてしまいました・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4
6.友達をいじめてしまいました・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4
7.友達の悪口を言ってしまいました・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4
8.自分の仲間に自分のせいで迷惑をかけてしまいました・・	1・2・3・4
9.友達を無視してしまいました・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4
10.人の物を盗んでしまいました・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4
11.友達の物を壊してしまいました・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4
12.授業中に授業と関係のないことをしてしまいました・・	1・2・3・4
13.自転車の２人乗りをしてしまいました・・・・・・・・・	1・2・3・4
14.信号が赤なのに道路を横断してしまいました・・・・・	1・2・3・4
15.校則を破ってしまいました・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4

選択肢
1.感じない
2.やや感じる
3.かなり感じる
4.非常に感じる

16.踏切が鳴っているのにわたってしまいました・・・・・　1・2・3・4

17.バス代，電車代をごまかしてしまいました・・・・・・　1・2・3・4

18.電車の中で騒いでしまいました・・・・・・・・・・・・　1・2・3・4

19.親に反抗してしまいました・・・・・・・・・・・・・・　1・2・3・4

20.親の許可なしで，夜遅くまで遊んでしまいました・・・　1・2・3・4

21.ゴミをゴミ箱に捨てないで，ポイ捨てしてしまいました　1・2・3・4

ここに書かれている文章の内容は，あなたにはどれくらいあてはまるでしょうか。非常に当てはまる場合は 5，やや当てはまる場合は 4，どちらともいえない場合は 3，あまり当てはならない場合は 2，全くあてはまらない場合は 1 に〇をつけてください。どれがいい答えというのはありません。とばさずに，感じたままに答えてください。

選択肢
1.全く当てはまらない
2.あまり当てはまらない
3.どちらともいえない
4.やや当てはまる
5.非常に当てはまる

1.おもしろい物語や小説を読むと，そのようなことが自分に起こったらどのように感じるかを想像する・・・・・・・・・　1・2・3・4・5

2.すぐに助けてあげないといけない人を見たら，どうしていいかわからなくなる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1・2・3・4・5

3.まわりの人が感情的になっていると，どうしていいかわからなくなる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1・2・3・4・5

4.他人をいじめている人がいると，腹が立つ・・・・・・・・　1・2・3・4・5

5.誰かに対し腹が立ったら，しばらくその人の立場に立ってみようとする・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1・2・3・4・5

6.ドラマや映画を見るとき自分も登場人物になったような気持ちでみることが多い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1・2・3・4・5

7.いじめられている人を見ると，胸が痛くなる・・・・・・・　1・2・3・4・5

8.私は身近な人が悲しんでいても何も感じないことがある　1・2・3・4・5

9.落ち込んでいる人がいたら，勇気づけてあげたい・・・・　1・2・3・4・5

10.急に何かが起こると，どうしていいかわからなくなる　1・2・3・4・5

選択肢
1.全く当てはまらない
2.あまり当てはまらない
3.どちらともいえない
4.やや当てはまる
5.非常に当てはまる

11.怒っている人がいたら，どうして怒っているのだろうと想像する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
12.ころんで大けがをした人を見ると，そこから逃げ出したくなる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
13.心配のあまりパニックにおそわれている人を見ると何とかしてあげたくなる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
14.本を読むときは，主人公の気持ちを考えながら読む・・・	1・2・3・4・5
15.人が冷たくあしらわれているのをみると，私は非常に腹が立つ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
16.ニュースで災害にあった人などを見ると，同情してしまう	1・2・3・4・5
17.テレビゲームの主人公になりきるのが好きだ・・・・・・	1・2・3・4・5
18.泣いている人を見ると，私はどうしていいかわからなくなって困ってしまう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
19.小説を読むとき，登場人物の気持ちになりきってしまう	1・2・3・4・5
20.友達の目からは物事がどう見えるのだろうと想像し，理解しようとする・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
21.困っている人がいたら助けたい・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
22.友達がとても幸せな体験をしたことを知ったら，私までうれしくなる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5

選択肢
1.全く当てはまらない
2.あまり当てはまらない
3.どちらともいえない
4.やや当てはまる
5.非常に当てはまる

23.誰かを批判するより前に，自分がその立場だったらどう思うか想像する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1・2・3・4・5

24.この人は不安なのだなというように，人がどう感じているかに敏感なほうだ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1・2・3・4・5

25.悲しい体験をした人の話を聞くと，つらくなってしまう 1・2・3・4・5

26.人から無視されている人のことが心配になる・・・・・・ 1・2・3・4・5

27.けがをして痛そうにしている人を見ると，気持が悪くなる 1・2・3・4・5

28.テレビや映画を見た後には，自分が登場人物の１人のように感じる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1・2・3・4・5

29.困っている人を見ても，それほどかわいそうと思わない 1・2・3・4・5

30.体の不自由な人やお年寄りに何かしてあげたいと思う・・・ 1・2・3・4・5

次に，人の感情や気持ちを表すことばが並んでいます。一つ一つのことばについて今，現在それらの感情をどの程度感じているかチェックしてください。

1.全く感じていない
2.あまり感じていない
3.少し感じている
4.はっきり感じている

1.気がかりな・・・・・・・・　1・2・3・4

2.不安な・・・・・・・・・・　1・2・3・4

3.悩んでいる・・・・・・・・　1・2・3・4

4.自信がない・・・・・・・・　1・2・3・4

5.くよくよした・・・・・・・　1・2・3・4

6.敵意のある・・・・・・・・　1・2・3・4

7.攻撃的な・・・・・・・・・　1・2・3・4

8.憎らしい・・・・・・・・・　1・2・3・4

9.うらんだ・・・・・・・・・　1・2・3・4

10.むっとした・・・・・・・　1・2・3・4

11.つまらない・・・・・・・　1・2・3・4

12.疲れた・・・・・・・・・　1・2・3・4

13.退屈な・・・・・・・・・　1・2・3・4

14.だるい・・・・・・・・・　1・2・3・4

15.無気力な・・・・・・・・　1・2・3・4

1.全く感じていない
2.あまり感じていない
3.少し感じている
4.はっきり感じている

16.活気のある・・・・・・　1・2・3・4

17.元気いっぱいの・　・・・　1・2・3・4

18.気力に満ちた・・・・・　1・2・3・4

19.はつらつとした・・・・　1・2・3・4

20.陽気な・・・・・・・・　1・2・3・4

21.のんびりした・・・・・　1・2・3・4

22.ゆっくりした・・・・・　1・2・3・4

23.のどかな・・・・・・・　1・2・3・4

24.おっとりした・・・・・　1・2・3・4

25.のんきな・・・・・・・　1・2・3・4

26.いとおしい・・・・・・　1・2・3・4

27.愛らしい・・・・・・・　1・2・3・4

28.恋しい・・・・・・・・　1・2・3・4

29.すてきな・・・・・・・　1・2・3・4

30.好きな・・・・・・・・　1・2・3・4

31.慎重な・・・・・・・・　1・2・3・4

32.ていねいな・・・・・・　1・2・3・4

1.全く感じていない
2.あまり感じていない
3.少し感じている
4.はっきり感じている

33.丁重な・・・・・・・・・　1・2・3・4

34.思慮深い・・・・・・・・　1・2・3・4

35.注意深い・・・・・・・・　1・2・3・4

36.びっくりした・・・・・　1・2・3・4

37.びくりとした・・・・・　1・2・3・4

38.驚いた・・・・・・・・・　1・2・3・4

39.動揺した・・・・・・・・　1・2・3・4

40.はっとした・・・・・・　1・2・3・4